

---

# お馬怪盗と悪魔の麻薬

暁月 麗華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お馬怪盗と悪魔の麻薬

### 【Nコード】

N2439Y

### 【作者名】

暁月 麗華

### 【あらすじ】

宝石怪盗をやっている青年セヴィスは、学校で最下位の成績をとりながら、秀才の兄ウィンズとともに暮らしていた。

だが、ある日盗んだ真紅の宝石によって、異世界にトリップしてしまう。

その世界は、全く同じ人間が住んでいるのに宝石を主食とする悪魔が出没したり、人間を激変させる麻薬があったり、学校が悪魔退治をする『ネクロス』の養成学校になっていたりと、何もかも変わっていた。

それでも懲りずに異世界でも宝石怪盗を始めたセヴィスは、狂った性格をした銀髪の悪魔シュバルツにことごとく邪魔をされるのだった。

## 序章 真紅の宝石

今日は、兄のウィンズに馬鹿にされるだろう。

教師に渡された茶色の封筒を見て、セヴィス「ラスケティアは思った。

昔のウィンズは、この封筒を開く度に偉そうな顔をしたという。

だがセヴィスから見れば、これはウィンズの機嫌を良くするものであり、自分の機嫌を悪くするものでしかない。

こんなもの、作る方がおかしい。こんなもの、何の為に存在するのだろう。

でも、見ないといけない。

セヴィスは教室に誰もいないことを確認し、封筒の中身を取り出した。

成績表と呼ばれる、忌々しい白色の厚紙に記された数字は、やはり五百分の五百だった。

「また最下位だったな」

突然セヴィスの横から現れたのは、幼馴染のハミル「スレンダーだった。

「お前つどこに隠れて・・・」

誰もいないと思っていたセヴィスは、驚いて成績表を落とす。

「はははっ放課後にセヴィス一人が残ってたら絶対成績表を見てるもんな。だから脅かそうと思って隠れてたんだ。いつも銅像みたいに無表情なお前が、あんなに驚くとこ初めて見たから思わず笑っちゃまったぜ」

ハミルは成績表を拾ってまじまじと見つめる。

「へえ〜体育の成績だけはすげーな」

「テストなんて、どうでもいい」

と言って、セヴィスはハミルから成績表を勢いよく奪い取って鞆に

入れる。

「出た！名言！お前テスト終わったらいっつもそれ言うつよな〜」

「本当のことを言って何が悪い」

「別に？……ていうかさ、お前おれから成績表奪うのすげー速くなかったか？」

セヴィスから返事はない。

「お前なら泥棒できたりして？まあこれ以上怪盗が増えるのは嫌だけれどな」

「……」

「聞いたか？また怪盗フレグランスの予告状来たんだってよ」

ハミルの父は『怪盗フレグランス特捜課』に所属している。その父を尊敬しているのか、ハミルはよく父の自慢話やフレグランスへの悪口を言ったりする。

それも、セヴィスはどうでもいい、の一言で済ましていた。だが、例外がある。

「予告状の通り盗むとしたら、今夜だよなあ。今回の宝石があるビルは窓ガラスが頑丈だし、さすがのフレグランスでも割れないだろ？だとしたら逃げる場所が入口しかない。だから親父は入口に警察を集中させるんだって」

「そつなのか」

この話だけは例外だ。警察の防備情報を聞けるのは、このハミルと話している時だけだからだ。怪盗フレグランスの立場からすれば、この話を聞き逃すわけにはいかない。

「あれ？珍しくどうでもいい言わなかったな」

「そんなことどうでもいい」

「あ、言ったな」

「……帰る」

「おい待てつて！おれを置いてくなよ！」

セヴィスはいいい情報が聞けたと思うと、本当に成績はどうでもよくなつた。

ハミルはいちいちしつこくて、時には邪魔とを感じるが、怪盗からすればハミルの存在は重要だった。

「なあ、お前のロッカーにこんなもん入ってたぜ」

セヴィスが学校を出る数分間に、いつの間に人のロッカーを開けたのか。ハミルは路上でたくさんの白い封筒をセヴィスに見せつける。だが、セヴィスはこの封筒を知らない。

「何だこれは」

「おれは知ってるぞ。これラブレターだろ。この色男め」

「ラブレターだと？」

ハミルは封筒に貼られたハート型のシールをはがし、一枚の便せんを取り出した。その差出人を見てハミルは目を見開く。

「おいおい嘘だろ？ルビアちゃんだぜ？これ。おれあの子狙ってたのになあ」

ルビアという少女は、学校内では有名らしい。だが、セヴィスはこれもまた知らなかった。

「ルビアとは……誰だ」

「知らないのかよ！？ルビアクォーツといえば、学校一のお金持ちだぜ？」

「興味ない」

後ろでハミルのため息が聞こえた。

「そんなこと言っていると、誰にも好かれなくなるぜ。モテるうちに彼女作つとけ。おれなんか、好きだって言ってもいつもごめんなさいの一言なんだぜ」

「生きて行く上で、女に好かれる必要はない。いるだけ重荷だ」

怒っているのか、黙ってハミルはラブレターを見つめている。

「大体お前は何人の女を狙ったら気が済むんだ。何回フラれても懲りないのか」

「へっおれは女の子と正義の味方だからな。だから美しい宝石を盗

んで女の子を悲しませるフレグランスは絶対許せねえ」

ハミルはどうしてすぐに開き直ってフレグランスの話題にしてしま  
うのだろう。こんな話題は、セヴィスを複雑な気分にするだけだ。  
と言うより、ハミルの話題全てがセヴィスを複雑にしていると言っ  
てもいい。

「お前もな、この手紙をお前のロッカーに入れる女の子の気持ち  
を  
考える」

ハミルは手紙の束をセヴィスに押しつけると、くるりと背を向ける。  
「じゃあな」

そう言っ  
て、ハミルは目の前にある自分の家に入っ  
ていった。  
こんな紙きれ貰っ  
て、嬉しいの  
だろうか。セ  
ヴィスにはハ  
ミルの気持  
ちが分からな  
かった。

分かったのは、フレグランスの存在は宝石好きの女に憎まれている  
ということだけだ。だが、いくら女に嫌われようと所詮は他人。セ  
ヴィスには関係ない。

そう思っ  
て、セヴィス  
は鞆にラブレ  
ターを突っ込  
む。それが、  
あの成績表の  
茶色の封筒に  
入ったことに  
セヴィスは気  
付かなかっ  
た。

ハミルの家の隣に、自分の家はある。ドアノブを握ると、テストの  
結果を馬鹿にするウインズの偉そうな顔が頭に浮かぶ。

そう思っ  
ると入る気が  
失せる。そこ  
でセヴィスは  
いつものもの  
どうでもい  
い思考を発動  
する。テスト  
のことを忘れ  
、家の扉を開  
けるとい  
う我ながらな  
んとなくくだ  
らない思考だ。

「ただいま」

家に入ると、おいしそうな匂いが漂ってきた。どうやら、ウインズ  
がハンバーグを焼いているらしい。ウインズが脂っこいものを作る  
のはなんとも珍しい。

いつも栄養分を細かく計算し、おいしくもない健康的な食事を作っ  
ているあのウインズが、ハンバーグを作っている。

「珍しいこともあるものだな」

セヴィスは一言呟いて、ウインズのいるキッチンに入る。すると、  
「遅いぞ。貴様、帰宅時間五時から三十秒遅れたな」

後ろを向いたままウインズが言った。

「三十秒くらい、別にいいだろ」

「罰として、お前のハンバーグは抜きだ」

「なっ……」

「今日のお前の夕食はこのウインズ様特製健康促進定食だ。光栄に  
思え！はっはっはっはっはっは！」

セヴィスは舌打ちしようとする自分を堪える。ウインズが高笑いす  
るときはいつもセヴィルが馬鹿にされた時だ。こうなったら反抗し  
ても全く話を聞いてくれない。

「何がウインズ様特製健康促進定食だ。ただの玄米を山盛りにした  
だけだろ」

「何か言ったか、馬鹿弟」

ウインズはセヴィスを睨みつけてきた。

だがその顔を覆う鉄仮面を、ウインズは何故か料理中に着用して  
いる。それも眼鏡をつけた上に鉄仮面だ。

前にこの鉄仮面を初めて見たハミルは、笑いが止まらなくなった。

「その鉄仮面、止めた方がいいと思う」

「何故だ？料理に唾が入っては不潔だからな、このくらいは当然だ  
ろっつ？」

「……クソ神経質が」

「フツ。料理が出来だぞ。たんと喰らうがいい」

ウインズは鉄仮面を外し、料理を机に並べる。その献立はどう考え  
てもおかしい。ウインズ側には、美味そうなハンバーグ二枚に適量  
の野菜、白米だ。そのハンバーグは元々セヴィスの分だった。

それに比べてセヴィス側には、大きな茶碗に玄米の大盛り、生の  
野菜、生卵。これが不味いウインズの健康促進定食。ウインズに逆  
らうと夕食はいつもこれだ。

「どうした？まさかこのウインズ様特製健康促進定食が気にいらな

いとても言うつのか」

「ああそうだ」

「では、不本意だが貴様にチャンスをくれてやるう」

と言つてウインズは水を一杯飲み、眼鏡を指で一度押し上げる。

「今日は貴様の成績表が返つて来たのだから？それが一番だったら、このハンバーグをくれてやるう」

「はあ……」

ウインズが絶対に無理な条件を押しつけて、それができない人を笑うのは昔からだ。チャンスという時点で期待をするべきではなかった。

「フツどうせお前のことだ。また馬鹿みたいな番数を取つて来たのだから？」

「……」

セヴィスは黙つて茶色の封筒を取り出してウインズに渡す。それをウインズは慣れた手つきで開けて、成績表を取り出す。成績表を見たウインズはすぐに笑いだした。

「はーはっはっはっは！！また最下位だと？笑わせるな！冗談も程々にしたらどうだ！」

「冗談じゃない。事実だ」

「こんな番数を取つてよく冷静でいられるな！僕なんて一番を譲つたことなど誰にもなかったぞ！」

「兄貴は特別なんだ。仕方ないだろ」

「全く、どうやってこんな点数を取れるのだ」

そう言いながら、ウインズは成績表を封筒に戻そうとする。すると、何かが引つ掛かつて入らない。

「何だ、入らないぞ」

ウインズは封筒に手を突っ込んで中に引つ掛かっていた物を取り出す。

「セヴィス、これは何だ」

ウインズが取り出したのは、先程ハミルがくれた女の子たちのラブ

レターの束だった。

「あつ」

取り返そうとするセヴィスを振り切って、ウィンズは便せんを声に出して読み始めた。

「『親愛なるセヴィス様へ。わたくし、あなたのことが気にいりましたの。よかつたら付き合って下さいませんか？返事はいつまでもお待ちしています。ルビアより』……だど？」

「……」

セヴィスは頭を抱えて、黙りこんだ。

「貴様のような馬鹿を気に入る女がこんなにもいるとはな。最近フレグランズと言う名の愚かな怪盗も出る。本当にこの世界はどうかしている」

それからセヴィスは一言も話すことはなく、夕食を済ませた。

夜十時半、セヴィスはベッドから下りて部屋の窓から飛び降りる。

ウィンズは毎日必ず十時に就寝し、五時に必ず起きる。彼の生活時間は絶対厳守なのだ。

それに、その間は絶対に起きない。気付かれることはない。

セヴィスはこれを利用して仕事をしていた。仕事というのはもちろん、泥棒だ。

予告状の予定は十一時。十時半に、セヴィスのやる気のない死んだ目が開く。

（俺の名は怪盗フレグランズ。嫌われようとか関係ない）

セヴィスは、生まれつきの体術で屋根の上を飛び移る。何故こんなに人間離れた跳躍力を持っているのかは、セヴィス自身も知らない。

今日盗むのは、最近発見された未知の真紅の宝石『ブラッド・エヴィデンス』だ。

高値で買い取るから、どうしても欲しいという他国の人間が続出し

ているからだ。セヴィスは、そんな人間たちに宝石を売って金を稼いでいた。

セヴィスが金を稼ぐ理由は、特にない。ただ盗むのが楽しいというだけだ。

「・・・・・・・・」

宝石のあるビルの前にはたくさんの警察が立っている。入口の反対側に回り込んだセヴィスは、屋根からビルの二階の壁に飛び移った。

「スレンド課長！今のところフレグランスの姿は見えませんが！」

「奴は近くまで来ているはずだ！十分に警戒しろ！」

ハミルの父ミストの声が聞こえた。警察はまだ自分に気づいていない。そのことを確認したセヴィスは、窓に自分の短剣を差しこみ、鍵を上を押上げて、窓を静かに開ける。

この窓はハミルの言う通り割って侵入するのは不可能だ。でも窓は鍵さえなんとかかすれば簡単に開く。たかが窓にこの怪盗フレグランスは敗れはしない。

中は真っ暗で、誰もいない。セヴィスの十メートルぐらい前に、その真紅の宝石があった。

「見つけた」

だが、誰も警備していないというのも変だ。セヴィスは辺りを十分に見回す。やはり誰もいない。ハミルの言っていた、入口に集中させるというのは本当だった。

宝石を守るガラスの蓋を取って、真紅の宝石を盗る。

防犯ベルが鳴り響く。

「フレグランスが出た！！」

ミストの声が聞こえた。これで何度目だろうか。ミストの、

「しまった！」

という声を聞くのは。聞く度に、笑えてくる。セヴィスは入ってきた窓から外に出て、再び屋根に飛び移る。今回は楽だった。

家に戻ってきたセヴィスは、いつものように、真紅の宝石をベッドの下の宝石箱に入れようとした。

すると、どこからか声が聞こえてきた。

『ねえ、悪魔と戦ってみな〜い?』

「だっ誰だ?」

焦ったセヴィスは窓や扉を見回す。誰もいない。

『ブラッド・エヴィデンスを手に入れるなんてすごいわぁ。普通の人間が触ったら燃え尽きちゃうんだけどね』

「この宝石が喋っているのか?」

『ああ、わたし悪魔の頭領のサキュバスっていうのぉ』

「悪魔?」

『わたしたちの世界はことと同じ人間が住んでるけどね、悪魔も住んでるのぉ。今度からわたしの世界のセヴィスⅡラスケティアとあなたで交代してもらおうかなあ〜って思ってるのぉ』

「何を言っているんだ……?」

セヴィスは、悪魔の頭領サキュバスの言っていることが理解できずベッドに潜る。

『逃げてても無駄よぉ。明日からあなたにはこっちに来てもらっつからねえ』

これは幻聴だ。宝石が喋るはずがない。

そう思ってセヴィスは眠った。



## 序章 真紅の宝石（後書き）

少し苦手な学園モノに挑戦しようと思って書きました。

そう思ってたらず、怪盗モノと悪魔モノも混ぜてきていると力オスな話になりそうです（汗）

あと上手くいけば下手クソな差し絵も投稿していききたいです（笑）  
文章も下手クソですが、

アドバイスがあればよろしくおねがいしますorz

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2439y/>

---

お馬怪盗と悪魔の麻薬

2011年11月5日21時11分発行